「沖縄県民を守った警察官　荒井退造さん」

荒井退造（あらい・たいぞう）さんは、1900 年 9 月、栃木県に生まれました。農家の次男として育ち、お父さんを早く亡くしましたが、お母さんとお兄さんに支えられて成長しました。とても努力家で、警察官として働きながら夜の学校に通い、試験に合格して内務省（今の総務省のような役所）で働くようになりました。

やがて全国の警察で働き、1943 年、沖縄県警察部長に任命されました。戦争が激しくなる中、「命をかけても県民を守る」と決意して沖縄へ赴任しました。

当時の沖縄は、アメリカ軍の攻撃が近いといわれていました。退造さんは、戦いに巻き込まれないように、お年寄りや子どもたちを本土や台湾に避難させる「疎開(そかい)」を進めようとしました。けれども、多くの県民は「家族を残して知らない土地へ行けない」「避難先で食べ物があるの？」と、不安で動こうとしませんでした。

それでも退造さんは、まず警察官や県職員の家族を先に避難させ、自らも家族を栃木に帰しました。息子の紀男さんは「飛行場で白い帽子を振って見送ってくれた姿が、最後の別れになった」と語っています。

警察官たちは暑さの中で汗を流しながら、子どもや病人を背負い、荷物を運んで船に乗せました。悲しいことに、疎開船の一つ「対馬丸」がアメリカの潜水艦に沈められ、1600 人以上が命を落としました。それでも退造さんは「亡くなった人たちのためにも疎開を止めてはいけない」と言い、仲間とともに疎開を続け、約 7 万人の県民を救いました。

一方で、当時の県知事は責任を果たさず、危険になると逃げ出してしまいました。空襲で那覇の町が火の海となったときも防空壕から出ようとせず、退造さんが代わりに警察や消防を動かして人々を救いました。県民の信頼は退造さんに集まり、彼は実質的に沖縄県の中心として働きました。

その後、逃げた知事の代わりに、島田叡（しまだ・あきら）さんが大阪から赴任してきました。島田知事は退造さんを信頼し、二人は力を合わせて、県民を北部の山間部に避難させました。沖縄から船で逃げることができなくなっても、「せめて一人でも多く生かしたい」という思いで働き続けました。その結果、15 万人以上の命が救われました。

しかし、戦いは激しくなり、退造さんと島田知事は最後まで県民と共に行動し、沖縄本島南部の摩文仁（まぶに）の丘で生涯を終えました。戦後、そこには「島田叡　荒井退造　最期の地」と刻まれた碑が建てられています。

今、その丘からは、美しい海と青い空が見渡せます。沖縄の平和な日々を見守るように、二人の魂は静かにたたずんでいます。

以上